

ウメノキゴケ

ウメノキゴケ（梅の木苔、*Parmotrema tinctorum*）は地衣類の一種。灰緑色の葉状地衣類で、樹皮や岩に着生する。世界の熱帯および温帯の一部に広く分布する。

日本では、日本海側豪雪地などを除く東北地方以南に分布し、これらの地方の平地では最もありふれた地衣類である。比較的乾燥した場所に生育しやすい。都市部にはないが、田舎では庭先から森林まで見られる。主として樹皮につき、名前（梅の木苔）の通り、ウメにもよく見られる。しかし、他の樹皮にもよく見られる他、岩の上に生えることもあり、石垣などでも見られる。排気ガスには弱いので都市中心部には少なく、大気汚染の指標とされている。

園芸、盆栽では樹皮にウメノキゴケのついた梅や松が古くから珍重され、生け花にも使われる。リトマス試験紙に使う色素リトマスを抽出することもできるが、実用にはされていない。また草木染めにも使われる。



タンポポ

タンポポ（蒲公英）は、[キク科](#)タンポポ属（*Taraxacum*）の総称である。[多年生](#)。多くは[ユーラシア](#)大陸に自然分布する。

多くの種では黄色い花を咲かせ、綿毛（冠毛）の付いた種子を作る。生命力の強い植物で、[アスファルト](#)の裂目から生えることもある。50 [センチメートル](#)以上もの長い根を持ち、最大で1 [メートル](#)程度まで伸びる個体も珍しくない。

[成長点](#)が地面近くに位置する[ロゼット](#)型の生育型で、茎が非常に短く葉が水平に広がっている。このため、表面の花や茎を刈っても容易に再び生え始める。[攪乱](#)の頻発する、他の植物が生きていけないような厳しい環境下で生えていることが多い。

日本における在来種と外来種[\[編集\]](#)

大きく分けると古来から日本に生育していた在来種と、近世に海外から持ち込まれた外来種がある（現在は帰化種といわれている）。在来種は外来種に比べ、開花時期が春の短い期間に限られ、種の数も少ない。また、在来種は概ね茎の高さが外来種に比べ低いため、生育場所がより限定される。夏場でも見られるタンポポは概ね外来種の[セイヨウタンポポ](#)である。

見分け方としては花期に[総苞](#)片が反り返っているのが外来種（写真左）で、反り返っていないのが在来種（写真右）。在来種は総苞の大きさや形で区別できる。しかし交雑（後述）の結果、単純に外見から判断できない個体が存在することが確認されている。

より個体数が多く目に付きやすいことから、「セイヨウタンポポが日本古来のタンポポを駆逐してしまった」というような記述が見られるが、これは正確には誤りである。セイヨウタンポポは在来種よりも生育可能場所が多く、かつ繁殖力が高いが、その反面で多くの在来種よりも低温に弱く、初春から初夏にかけての寒暖差が激しい条件下では生育できない場合も多い。セイヨウタンポポの個体数が多いために相対的に在来種の割合が減っただけで、在来種も一定の個数で存在している。また、茎を大きく伸ばさないため、かえって都市部で在来種が見られる場合もままある

ニホンタンポポ・セイヨウタンポポ



タンポポ（シロバナタンポポ）

シロバナタンポポは在来種であり、中国地方では広く分布している。瀬戸内側を除き、セイヨウタンポポなどの帰化種が侵入するまでは、タンポポといえばシロバナタンポポを指していた（ちなみに、岡山市から広島市までの瀬戸内海沿岸域では、在来種は黄色い花の咲くカンサイタンポポがメジャーである）。岡山市では分布の境界領域にあることから、生育量は少ない。



ツバメ

ツバメ（燕、*Hirundo rustica*）は、[スズメ目ツバメ科ツバメ属](#)に分類される鳥類。古くはツバクラメあるいはツバクロと呼ばれた

[北半球](#)の広い範囲で繁殖する。[日本](#)では[沖縄県](#)でも繁殖する。日本で繁殖するツバメの主な越冬地は[台湾](#)、[フィリピン](#)、[ボルネオ島](#)北部、[マレー半島](#)、[ジャワ島](#)などである。

[鳴管](#)が発達しており、[繁殖期](#)になるとオスはチュビチュビチュビチュルルルと比較的大きなさえずり声で鳴く。日本語ではその生態を反映して「土食て虫食て口渋い」などと[聞きなし](#)される。さえずりは日中よりも早朝から午前中にかけて耳にする機会が多い。

飛翔する[昆虫](#)などを空中で捕食する。また、水面上を飛行しながら水を飲む。

一部、日本国内で[越冬](#)する個体があり、しばしば「越冬ツバメ」と呼ばれる。特に[中日本](#)から[西日本](#)各地で越冬し、そのような場合、多くは集団で[民家](#)内や軒下などで就壻（しゅうじ）する。日本で越冬している個体が日本で[繁殖](#)したものであるのか、それとも[シベリア](#)など日本より北方で夏に繁殖したものであるのかはよく分かっていない。

[泥](#)と枯草を[唾液](#)で固めて[巣](#)を造る。ほとんど人工物に造巣し、民家の軒先など人が住む環境と同じ場所で繁殖する傾向が顕著である。これは、[天敵](#)である[カラス](#)などが近寄りにくいからだと考えられている。

巣は通常は新しく作るが、古い巣を修復

して使用することもある。[産卵期](#)は4 - 7月ごろ。一腹卵数は3 - 7。主にメスが[抱卵](#)する。抱卵日数は13 - 17日。その後の巣内での育雛日数は20 - 24日。1回目の繁殖の巣立ち率は概ね50%程度と推定される。1回目繁殖に成功したつがいあるいは失敗したつがいのうち、詳細は不明であるが、相当数のつがいがその後2回目あるいはやり直しの繁殖をする。



コシアカツバメ

コシアカツバメ（腰赤燕、*Hirundo daurica*）は、[スズメ目ツバメ科ツバメ属](#)に分類される[鳥類](#)。夏季にヨーロッパ南部、中央アジア、ウスリーなどで繁殖し、冬季になると東南アジアやインド、中華人民共和国南部へ南下し越冬する。日本では夏季に繁殖のため九州以北（主に[本州](#)中部以西）に飛来する（夏鳥）。日本国内の繁殖地は北へ拡大傾向にある。四国や九州で越冬する個体もいる。[市街地](#)や[農耕地](#)などに生息する。繁殖地ではねぐらを作らず、繁殖後も渡りの時期まで巣をねぐらとして用いる。

食性は動物食で、主に[昆虫](#)を食べる。集団営巣する傾向がある。崖や民家の軒下、橋桁などに土と枯れ草で固めた出入り口が細長い徳利や壺状の巣を作る。このためトックリツバメと呼ばれている地方もある。日本では5-8月に4-5個の卵を産む。抱卵期間は14-20日雛は孵化してから23-25日で巣立つ。



イワツバメ

イワツバメ（岩燕、*Delichon urbica*）は、[鳥綱スズメ目ツバメ科](#)に分類される鳥類。

夏季にアフリカ大陸北部やユーラシア大陸で繁殖し、冬季になるとアフリカ大陸や[インド](#)北部、[東南アジア](#)へ南下し越冬する。[中華人民共和国](#)南部などでは周年生息する。日本には亜種イワツバメが繁殖のために[九州](#)以北に飛来（夏鳥）するが、西日本では渡来地は局地的である。温暖な地域では越冬することもある。

平地から山地にかけて生息する。

食性は動物食で、[昆虫](#)を食べる。群れで飛行しながら口を大きく開けて獲物を捕食する。

繁殖形態は卵生。[海岸](#)や山地の岩場に泥と枯れ草を使って上部に穴の空いた球状の巣を作り、日本では4-8月に1回に3-4個の卵を産む。岩場に営巣することが和名の由来。集団で営巣する。



ジョロウグモ

ジョロウグモ（女郎蜘蛛、上臈蜘蛛、**学名**: *Nephila clavata*) は、**クモ目ジョロウグモ科ジョロウグモ属**に属する**クモ**である。**夏**から**秋**にかけて、大きな**網**を張るもっとも目立つクモである。**性的二形**が大きく、**成体の体長**は雌で17~30mmなのに対して、雄では6~13mmと雌の半分以下である。形はほぼ同じで、**腹部**は幅の狭い**楕円形**で歩脚は細長い。成熟した雌の腹部には幅広い**黄色**と緑青色の横**縞模様**があるのが特徴であり、腹部下面に鮮**紅色**の紋がある。ただし、成熟する寸前までは雄のような斑模様が見られる。雄は雌に比べて小さく、色も**褐色**がかった黄色に濃色の縦じま混じりの複雑な模様がある。歩脚は暗い褐色に黄色の帯が入る。ジョロウグモの網は、とても大きく、直径1mくらいのももある。横糸が黄色いので、光が当たると**金色**に光って見える。

ジョロウグモの網は、いわゆる**クモの網**として、普通に知られている網の形、**円網**の一種だが、特殊な部分がたくさんある。円網は、ふつう、外側に「**枠糸**」があり、その枠の中に、中心から**放射状**にのびた「**縦糸**」と、**同心円**を描くように（実際には**螺旋**）張られた「**横糸**」からなり、横糸に**粘液**がついているものである。隣り合った縦糸の間の空間は**扇形**になり、そこに張られる横糸は、当然ながら中心から遠いほど長くなる。ところが、ジョロウグモの網の場合、それぞれの縦糸間の横糸の長さが、中心近くでも、外側でもそれほど変わらない。これは、ジョロウグモの縦糸が、外に行くにつれて二又に枝分かれするように張られているからである。

ジョロウグモは **JSTX-3** という**毒**を持っており、興奮性神経の**伝達物質**である**グルタミン酸**を阻害する性質がある。ただし、一匹がもつ毒の量は微量であり、人が噛まれたとしても**機械的障害**もない場合がほとんどである。



アメリカザリガニ

アメリカザリガニ（学名：*Procambarus clarkii*）は、[エビ目](#)（十脚目）・[ザリガニ下目](#)・[アメリカザリガニ科](#)に分類される[ザリガニ](#)の一種。学名は *Scapulicambarus clarkii* とされることもある。[アメリカ](#)原産だが、[日本](#)を含む世界各地へ移入され、[分布](#)を広げた[外来種](#)である。

[平野部](#)の水田、[用水路](#)、[池](#)など、[水深](#)が浅くて流れの緩い泥底の[環境](#)に多く生息し、流れの速い川には生息しない。[湿地](#)に穴を掘って生息し、夜になると出歩いて餌を探す。雨天では日中もしばしば活動し、岸辺に上陸して動き回る姿も見られる。冬は穴に潜んで[冬眠](#)する。

食性は[雑食性](#)で、[藻類](#)、[水草](#)、[落葉](#)、[小魚](#)、[オタマジャクシ](#)、[水生昆虫](#)、動物の死骸など何でも食べる。飼育下で長期間[サバ](#)などの[カロチン](#)を含まない食品を与えると体が青くなる^[4]。

[天敵](#)は[オオクチバス](#)、[ライギョ](#)、[ナマズ](#)、[ドンコ](#)、[ウシガエル](#)、[サギ類](#)、[イタチ](#)、[カメ](#)、[ウナギ](#)などだが、餌が少ない場合や個体密度が高い場合、[脱皮](#)中の個体と多個体が遭遇した場合等には[共食](#)いもする。

日本では嗜好の違いからあまり[食用](#)とされないが、原産地の[北アメリカ](#)では食用に漁獲され地元の名物料理とされている。

[フランス料理](#)の高級食材[エクルビス](#)には、アメリカザリガニ、[ウチダザリガニ](#)などが使用される。豪州でも日常的に家庭で調理される。また、[中華料理](#)でも小龍蝦（xiao long xia）と呼ばれ人気の高い[食材](#)である。

一方、水田では[蛙](#)に穴を開け、[イネ](#)の根を食い荒らすとして嫌われる。また、アメリカザリガニが侵入し繁殖した水域では水草や小動物がことごとく食い尽くされ、残るのはアメリカザリガニだけという状況が発生することもある。

[特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律](#)によって[要注意外来生物](#)に指定されている。[特定外来生物](#)の指定ではないため、飼育や販売などの規制はない。ただし、いくつかの都道府県では移植が禁止されている。



ダンゴムシ

ダンゴムシ（団子虫、英：wood louse, *p/l.* wood lice）とは、[ワラジムシ目](#)（等脚目）の動物のうち、陸生で刺激を受けると丸くなる習性を持つものを指す。一般に「ダンゴムシ」と呼ばれるものはオカダンゴムシである。

広意の[土壌](#)に生息して[分解者](#)の役割を担っており、土壌形成上一定の役割を果たしているものと考えられており、食性と生態から自然界の[分解者](#)という要素が強い。

- 落ち葉を食べて、[微生物](#)が分解しやすい状態にするダンゴムシは土壌を豊かにする。しかし、落ち葉以外にも[農作物の葉や茎](#)（特に新芽）も食べたり、[不快害虫](#)としての側面も持ち、駆除の薬剤も販売されている。
- コンクリートや踏み固められた[粘土質](#)の土など固い地面の上に置くと、少し息を吹きかけただけで丸まりよく転がるため、[子供](#)のおもちゃ替わりにされてきた。踏みつけると子供の体重でも潰れるが、柔らかい[土](#)の上で丸まっていれば潰されないだけの硬さを持つ。
- [アリ](#)と同様、ダンゴムシが地上に大量に這い出してきたときは[地震](#)が起きるという[宏観異常現象](#)が、[伝承的](#)あるいは[迷信的](#)に言われている。
- 鼠婦（ソフ）と呼ばれる[漢方薬](#)の材料となる。乾燥させた全虫が用いられ、[利尿作用](#)・[排尿困難](#)・[尿量減少](#)に[効能](#)があるとされる^[1]。
- [甲殻類](#)の仲間で、[毒](#)などを持っていないダンゴムシは、災害時の[非常食](#)として利用できる^[2]。



ミミズ

ミミズ（蚯蚓）は、[環形動物門貧毛綱](#)（学名：Oligochaeta）に属する動物の総称。[目](#)がなく、[手足](#)もない[紐状](#)の動物である。名称は「目見えず」からメメズになり、転じてミミズになったとも言われ、西日本にはメメズと呼ぶ地域がある。多くは陸上の[土壌](#)中に住む。

多くのミミズ類は[雌雄同体](#)である。[生殖](#)時期になると、二頭の[成体](#)が体を逆方向に向けて環帯部分の腹面を接着することにより[交接](#)をおこない、[精子](#)を交換する。交接後、ミミズは環体の表面に筒状の[卵胞](#)を分泌し、これと体の隙間に複数の[受精卵](#)を産卵して栄養物質を分泌する。産卵と分泌が完了すると、[首輪](#)を脱ぐように卵包を頭部の方向に送りだし、頭部から離脱すると、筒状の卵包の前端と後端が収縮して受精卵と栄養物質を密閉する。

[発生](#)は[直接発生](#)で、ほぼ親と同じ姿の[幼生](#)が生まれる。

ミミズは土を食べ、そこに含まれる[有機物](#)や[微生物](#)、小動物を[消化吸収](#)した上で粒状の糞として[排泄](#)する。それによって、[土壌](#)形成の上では、特に植物の生育に適した[団粒構造](#)の形成に大きな役割を果たしている。そのため、[農業](#)では一般に[益虫](#)として扱われ、[土壌改良](#)のために利用される。ただし、同じミミズとは言っても[シマミミズ](#)のように腐敗有機物を主食とするものと、[フトミミズ](#)類の多くのように腐植を含んだ土壌を主に摂食するものでは、土壌との関係も異なっており、且つ土壌の環境によって出現するミミズの種類も大きく異なってくる。また、ミミズは1日あたり体重の半分から同量程度の餌を摂取し、その糞が良質な[肥料](#)や[土壌改良剤](#)として利用できることから、積極的に[生ごみ](#)等の有機物をミミズの餌として与え、その糞を肥料として利用する[ミミズ堆肥化](#)という手法がある。



メダカ

メダカ（目高、鱈(魚に将)）またはニホンメダカは、[ダツ目](#) メダカ科（アドリアニクチス科）に属する魚である。[西欧](#)世界には、[江戸時代](#)に来日した[シーボルト](#)によって、[1823年](#)に初めて報告された。

流れのゆるい[小川](#)や[水路](#)などに生息し、動物[プランクトン](#)などを食べる。[蚊の幼虫](#)[ボウフラ](#)を好んで食するため、ボウフラを退治する[益魚](#)としても知られている。1回の[産卵](#)で、約10個の[卵](#)を産む。通常、[春](#)から[夏](#)にかけて産卵し、孵った[仔魚](#)は夏、[秋](#)の間をかけて成長し、次の年に産卵する。早い時期に[孵化](#)したもののなかには、その年の秋に産卵をする[個体](#)もある。メダカの産卵時期と水田に水が張られる時期は一致しており、日本の稲作文化と共存してきた「水田の魚」とも称される。また、腎機能が発達しているため耐塩性が非常に高く、慣れさせれば、海水で生活することも可能である。この体質を利用し、台風などの洪水で海に流されても河口付近の汽水域に駐留し、流量が緩やかになってから遡上することができる。

かつて日本では、[童謡](#)「[めだかの学校](#)」にも歌われたように、小川にはごく普通にメダカの群れが見られた。しかし、[1980年代](#)あたりから野生のメダカが各地で減少し始め、姿を見ることが難しくなった。減少の主な原因は、[農薬](#)の使用や[生活排水](#)などによる環境の悪化、[護岸工事](#)や[水路](#)の整備などによる流れの緩やかな小川の減少、繁殖力の強い[外来種](#)（[ブルーギル](#)や[カダヤシ](#)など）による影響が挙げられている。また、メダカは[水田](#)のような一時的[水域](#)に侵入して繁殖する性質が強く、近年の[農地改良](#)に伴う用排分離により、用排水路から繁殖時に水田内に進入することが困難になっていることが特に致命的となっており、メダカの繁殖力を著しく削いでいる。



こうしたメダカを取り巻く環境の変化により、[1999年2月](#)に[環境庁](#)（当時）が発表した[レッドリスト](#)にて絶滅危惧II類（VU）（[環境省レッドリスト](#)）（[絶滅](#)の危険が増大している種）にメダカが記載され、メダカは[2003年5月](#)に[環境省](#)が発表した[レッドデータブック](#)に[絶滅危惧種](#)として指定された。身近な生き物だったメダカが絶滅危惧種となったことはマスメディアにも大きく取り上げられ、日本各地で保護活動が活発に行われるようになった。